

シンポジウム『緘黙症克服への取り組みのために - 成果と問題点 - 』

日本特殊教育学会第46回大会 自主シンポジウム6 2008年9月19日

企画者	浜田貴照	(かんもくの会)
	久田信行	(群馬大学教育学部)
司会者	藤田継道	(兵庫教育大学大学院 学校教育研究科)
話題提供者	山本洋子	(場面緘黙当事者)
	浜田貴照	(かんもくの会)
	久田信行	(群馬大学教育学部)
	阿久津賢治	(群馬大学教育学部)
指定討論者	加藤哲文	(上越教育大学 学校教育研究科)

本シンポジウムの企画趣旨

1. 昨年の大会において、準備委員会企画シンポジウム「体験者が語る緘黙症の指導体制を巡る日本の実情」を開催させていただいた。
2. 前回のシンポジウムでは、緘黙症の当事者、緘黙児の保護者及び緘黙生徒に関わってきた教師が話題提供者としてそれぞれの立場での体験を語り、緘黙症を巡る諸問題の原因と解決のための方策を研究していただくことを訴えた。
3. 本シンポジウムは昨年のシンポジウムに続くものである。
4. かんもくの会の当事者会員、保護者会員の子ども及びその他の例から、緘黙症の当事者には、大別して、子どものうちにまたは成人後に治る(克服する)人たちと、成人後も緘黙症そのものまたはその二次的な症状を引きずる人たちが存在することが分かっている。
5. 子どものうちは主に学校などから報告がされるのでその存在が知られる。
6. しかし、成人後は代わりに報告をしてくれる者がいなくなる。
7. 症状が重いほど自ら状態を訴えることが難しくなるのが緘黙症の特性であるために、従来、成人緘黙症当事者の実態は全くと言ってよいほど知られていない。
8. 本シンポジウムの第一の目的は、成人後も緘黙症の影響により社会適応に困難を抱える人々が多数存在する事実、中でも重度の症状に苦しむ人々の存在を知っていただくことである。この点については、山本が当事者の立場から、ご報告する。
9. 緘黙症の子どもは一般的に家庭ではふつうに振舞うので、最も身近にいる保護者(家族)に事態をあまり問題視されていない場合が多い。関知すらされていない場合もある。
10. かんもくの会の保護者たちは成人当事者と直接交流することにより、緘黙症は成人後にも深刻な影響を引きずる可能性がある現実を目の当たりにしている。
11. したがって、なぜできるだけ早く症状が改善するように子どもを支援する必要があるのか理解しており、多くの保護者が子どもの支援を行っている。
12. 本シンポジウムでは、その中で、昨年のシンポジウムで紹介された緘黙児指導書『場面緘黙児への支援』を活用して保護者が主導的に支援に取り組んでいる事例を報告する。
13. 保護者の実践報告より、支援により顕著な成果を得られる一方で、日本の学校環境では保護者に多大な負担が強いられることが明らかになった。
14. 主体的に支援を行う意志をもつ保護者が容易に学校と連携できる環境を整備していただきたい。保護者の取り組みは、浜田が会員の実践を基にご報告する。
15. また、多くの緘黙児童生徒は保護者に危機意識をもってもらえないのが現実なので、教師(学校)が主導するスタイルの支援方法も研究していただきたい。この点については、久田が担任の実践例をご報告する。